



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

グラント先生のこと

著者	高山 修
雑誌名	主流
ページ	10-12
発行年	1975-09-16
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015258

懇切な御指導をたまわりました。Masefield の詩などを一緒に読んだ日もありました。すし屋でお酒のおつき合いをした日もありました。御宅のパーティに招いて下さったり、アメリカ留学のお世話をして下さいたり、英文科での勉強会にさそって下さったり、私は身に余る御恩を受けました。英文科における先生の最初の「教え子」の一人として、何一つ御恩に報いることなく、ただただ慙愧にたえません。語りたいことは尽きませんが、ここに先生との思い出の片鱗を記して、心から悼み悲しむ次第です。

グラント先生のこと

高 山 修

たしか四年生の後期頃だったから昭和26年の秋のことだと思う。グラント先生から同級の北垣宗治氏と私とに毎週一回先生宅で会合をやるので加わらないかとの誘いがあった。どんな集りなのか、どんなメンバーなのか、くわしいことはわからないままに決められた日時に飛鳥井町のお宅を訪れた。

最初のメンバーが誰々であったかについては記憶さだかではないが、その後二年間ほど続いたこの会合には、北垣氏と私のほかに、金関寿夫、宮井敏、斎藤勇、浅田美代子、岩山郁代、山田時子、大下道の諸氏が出席されていた。ほとんどの場合は夕食後に集まって9時頃に終るのであったけれど、時には夕食を御馳走になったり、また話がはずめば終るのが10時をすぎることもあった。

この会合は決められた方式でおこなわれたわけではなく、さまざまなことが試みられた。メンバーの誰かがあるトピックに関して introductory talk をやったあとで皆で話しあうとか、決められた作品（主として詩や短

篇小説)を読んでおいて話しあうとか、時にはゲストを招いて話を聞くこともあった。たしか、この集まりがはじまって間もなくの頃、フランス文学の桑原武夫先生をお招きしたこともあった。Why do we study literature? というような基本的な問題について話しあったこともあったし、Wagner の *Tristan und Isolde* のレコードを聞いて E. A. Robinson の詩 *Tristram* との比較を試み、詩と音楽との関連について話しあったこともあった。

この会合に参加したものは各人各様に大きな収穫をえたはずだ。私たちにとってグラント先生はまことによき leader であり、同時によき mediator であった。またときにはきびしい critic でもあった。どんなに未熟な考えであっても頭ごなしに否定されることはめったになかった。私は、自分の粗雑な考えが、先生から Why? とか How? とか問いかけられることによって、不足が補われ、誤りが修正され、まとまりあるものになっていくのを何遍も経験した。この会合には、自分の考えがいかに未熟であっても、遠慮することなしにそれを語りうるという雰囲気があった。これは貴重な雰囲気であった。また、お互いの意見がくいちがっていても、それらの平和的共存が可能であるという雰囲気もあった。それも、決して馴れ合いによるものではなかった。こうした雰囲気がつくられたのは、グラント先生の tactics によるものでもあったろうが、それ以上に先生の教育者としてのすぐれた人格によるものであったと思う。

もちろん、この会合では英語が話された。私たちの話す英語は、先生にとってまことにもどかしいものであったにちがいない。そんな英語を辛抱づよく聞いてくださった先生に心から感謝する。この会のメンバーのほとんどはその後アメリカへ留学したのだが、この会での経験は各人にずい分大きな助けになっただろうと思う。

教壇で大きな図体をゆさぶりながら講義される赤ら顔の先生の姿からはとうてい想像できないような神経のこまやかさを先生は秘めておられたと

思う。先生のそんな一面をこの会合を通して私ははじめて知った。その後、およそ20年間、いろいろなことでお世話になったが、私にとってグラント先生は常に思いやりのある誠実な助言者であった。先生のご冥福を心からお祈りします。

グラント先生をしのんで

根 本 加 寿 子

「恩師」という語感はあまり好きではないのだけれど、グラント先生は、私にとって、恩師としか言いようのない方だった。

先生との最初の出会いは、大学の英文学科主催の懇親会の時で、私が二年生になった時だった。順番に誰かを指名するというやり方で自己紹介が始まり、やがてグラント先生が立ち上がられた。たまたま同じテーブルに坐り合わせた私は、先生の巨体と思いがけないほどナイーブな瞳を見上げながら、先生の自己紹介を聞いたのだが、最後に「前田さん」と呼ばれたのには驚いた。初対面の先生から指名されるという予期せぬ出来事に驚いて飲物にむせている私に、先生はいたずらっぽい笑顔とウィンクを送って来られた。以後、キャンパスや図書館や街で偶然お会いすると、近視の私は、たいてい自分から気づく前に、先生から「ハイ、前田さん」と声をかけられることになってしまった。

二年、三年と、先生の文学史や小説研究の講義を興味深く聴き、課題のレポートなどもおほめを頂いたりし、私は比較的良い生徒だったようだ。それでも、サルトルやカミュに夢中になったり、サークル活動の方に熱を入れたりしていた私は、英文学科の学生としては不熱心な方で、一方、グラント先生も、私にとって、わりと親しい先生の一人であるにとどまっ